

# マルクス主義による人間改造の問題

阿 部 矢 二

## 一 理論と実践

二 コルホーズによる農民心理の改造

三 宗教と物質的生活

四 中国における事例

## 一 理論と実践

人間は何等かの人生観——自分と社会との関係についての認識から得られる処世方針——をもって生活している。たとえそれがきわめて素朴な、伝統的な言いつたえ——因果応報、勧善懲悪といったようなものから、長いものには巻かれよ、地獄の沙汰も金次第等々にいたるまで——であるにしても、人はそれを生活のよすがにして、人生のいろいろの変化に処してゆく。処世方針が非科学的で誤ってれば、予想した目的を達することができないで、その人の生涯は失敗に終るだろう。

ところで、人は社会の外で孤立して、社会の進展と無関係で生活できるものではないのだから、個人の生活は社会の変化とともに盛衰せざるを得ない。したがって、個人の生活を律する人生観は、社会の変化を規定する社会の運動法則を基準として、科学的な世界観と矛盾しないものとなったとき、そのときはじめてほんとうにその

人の一生を正しい方向へ、生き甲斐のある生涯たらしめるような、そんな生活ができる方向へ、的確に導き得る哲学＝科学となるのである。

階級社会では、科学もイデオロギーも相対立する二つのものに分派する、現状維持を利益とする支配階級のもと、現状打破、革新を利益とする被支配階級のもとがそれである。資本主義社会における被支配階級・プロレタリアートの哲学は、弁証法的唯物論である。哲学の根本問題——物質と意識の関係についての問題——で唯物論は、物質をもって本源的・第一義的なものと認め、意識（感覚、精神、観念など）を派生的・第二義的なものと見做す。唯物論によると、

物質とは、人間の意識から独立に存在している客観的な実在である。「物質は、われわれの感官に作用して、感覚をひきおこすもの、感覚においてわれわれに与えられてある客観的な実在である。」(1)これにたいして、人間の意識は、物質を反映したものであり、それ自身物質である脳髓の作用の特殊な形態である。それゆえ、物質をはなれて意識はあり得ないのである。

存在するもの、外界——自然と社会——と人間とは、すべて物質だが、物質の本質については、運動のない物質は、物質のない運動と同じように考えられない、運動は物質の属性であり、物質の存在形式であると云うことができる。存在するもの、物質は、すべて運動、変化するのだから、「存在するものはすべて滅亡に値する」のであり、およそ、不滅なもの、永遠なものはあり得ない。社会の内部においても、あるものは絶えず死滅してゆき、同時にあるものが絶えず新たに生れ出つつあるのだから、「つきからつきへと続く一切の歴史的状态は、低きより高きへと向上する人間社会の無限の発展の道程における一時的階段」(2)にすぎないのであ

る。外部の社会が変化すれば、人間の頭脳におけるその変化の思想的映像たる諸々の観念もまた変化せざるを得ないのであり、外界とその認識とは「前進的な発展」に貫かれた運動をもって、その定在の形式としてるのである。自然と社会と意識と運動——生成と衰滅の過程、低きより高きへ向う無限の連続的過程——が人間の思索的頭脳に反映したもの、それが弁証法的唯物論なのである。

この哲学は、存在するものうちに必滅を認め、あらゆる運動の前進的性質を認めるといふ点で、本質的に革命的で、新興階級の利益を代表したものであり、また事実上プロレタリアートの勃興とともに完成されたのである。すべての科学や理論は、実践の提出する問題に答えなければならない、その場合、科学や理論の正しいか、間違っているかが、実践において客観的に検証される。現実の問題を説明し解決することができるか否かが、科学、理論の真偽をテストする唯一の基準である。弁証法の理論と方法は、その科学的総合としてのマルクス・レーニン主義の正しさは、プロレタリアートの階級闘争の実践のうちで疑う余地なく立証されている。

「毛沢東思想の生成、発展、成熟には、すでに二十四年のながい歴史があり、幾百万幾千万人民のはげしい無数の闘争において、くりかえし試験され、それが客観的真理であり、中国をすくう唯一のたゞしい理論であり、政策であることを証明されてきた。過去の無数の歴史的事実は、革命が同志毛沢東とその思想の指導のもとにあったさいには、その革命がいつでも勝利し発展したことを証明している。」<sup>(4)</sup>

このような真実から目をそむけ、歴史の前進的な運行にさからって歴史の歯車を逆転させようとするもの、それは社会の現状において最も大きな利益を得ている支配・搾取階級である。彼らは本来保守的だが、その支配が危機に瀕するにいたるにしたがって、恐怖症が昂進して狂気のような反動になる。彼らは人民を教育する必要を

感じながら、教育によって人民の階級的意識が高まり、積極性をもつようになることをおそれた。それは例えば、明治三十年帝国教育大会における文部省参事官岡田良平の談に見られるようである。すなわち、

「教育が進歩すると云うことは即ち「ダイナマイト」をもって居るものである。然るに「ダイナマイト」を狂人が拜舞しては実に堪ったものではありませんぬ」のごとき。

もともと、日本の教育は客観的事物の間の法則を明かにすること、真理を探ることを目的としたものではない。学問の目的は国家の——ブルジョアジー・地主の——目的、利益に従属されべきだという考方が当然のように思いこまれていた。文部大臣森有礼はいつている。「学政の目的も亦専ら国家の爲めと云うことに帰せざるべからず。例えば帝国大学に於て教務挙る、學術の爲と国家の爲とに關することあらば、国家のことを最先にし、最重んぜざるべからざる如し。」と。

当然のことだが、支配階級の科学、イデオロギー一般は、真理とは無縁のものだから、実践における検証に耐えず、その非科学性を暴露し、彼らの実践を失敗にみちびく。真理に、進歩に、叛くものの必滅——それを歴史の事実が証明している。以下の論述は、新たに興り成長してゆくものの合理性と不敗・必勝についての二三の理論的例証である。

註(1) 永田広志訳レーニン「唯物論と経験批判論」第三章第一節 一九九頁

(2) エンゲルス「フォイエルバッハ論」岩波文庫版 三三頁

(3) 右同書 三四頁参照

(4) 「整風文献」党について・劉少奇・國民文庫版 一八四—一八五頁

原子力を殺人に、文化の破壊に用いるに専念しているものの反動性について、ジャン・ホール・サルトルは次

のように書いてある。

『もしフランス人が戦争に負けるようなことがあれば、われわれは爆弾を投げる。人間がどうなろうと知った事じやない、インドシナ人であろうと、中国人であろうと、ロシア人であろうと、容赦なく投げてやるんだ』世界の進化をとどめるために、進化の担い手を亡ぼすことによって、歴史を停止させようというのだ。これが、彼らのなしうるすべてである。人間が変化するのを妨げるために、人間を殺してしまおうというのである。……それは、人類の前に、現状維持か完全破壊かという二者択一をおしつけている。もちろん人類が亡びてしまえば変化もおこらないですむことはたしかである。』昭和二十九年九月号「世界」——歴史に反逆する武器・水素爆弾——三二頁

## 二 コルホーズによる農民心理の改造

私有財産の発生とともに人間の心のうちに私有欲が芽生えた。財産を握るものは同時に権力を握り、直接的生産者を経済的、政治的に屈服し隷従させることによってその剰余労働を搾取し、それによって財産を殖やし権力を強化してきた。人間の文化史は、私有財産と搾取形態の変遷の、したがって階級闘争の歴史である。だから、今日すべての人の胸のうちに巣くう私有欲の生命は、文化史とともに数千年を生きのびてきたのである。

ロシアの十月大革命はブルジョア権力を破砕し、ソヴェト権力によってこれを置きかえ、資本家地主を収奪して大資本と大土地との所有権を人民の手に移した。これによって、資本家地主階級による勤労者階級抑圧と搾取の社会体制——資本主義は、そのよって立つ現実の物質的基礎を失い、人民が終局的に解放されるための主要諸条

件がつくられた。かくして、体制としての資本主義の揚棄とともに、社会主義の方向へ発展すべき可能性にたいして広い道が拓かれ、敵対階級に分裂した人間社会の前史は終りをつける段階にたちいたったのである。

労働者農民による権力と主要な生産手段の奪回は、比較的短時日のうちになしとげられたが、社会主義社会を創出しそれを共産主義の段階へ向上発展させる大事業は、数世代にわたる全人民の総力を結集した結果にまたねばならないものである。共産主義はソヴェト権力プラス電化、といわれるとおり、その実現は、マルクス・レーニン主義の計画と指導による社会的生産力の飛躍的昂揚を物質的土台としてはじめて期待される。

物質的財貨の生産を急テンポで大規模にあげるためには生産力の担当者・労働者農民が、社会主義的生産諸関係に適合した社会主義的意識をはつきり身につけたところの人材となっていなければならない。社会主義社会では生産を増大させることによって自然と社会を変革し、この外界との闘争過程に生産過程を通じて働く人間自身の改造を意識的、組織的に計画し実践する。社会主義的生産の目的は「社会全体のたえずたかまりゆく物質的、文化的需要を最大限にみたくす<sup>(1)</sup>」という人間の福祉のやむことなき増進であるが、人間はこのような生産に参加し文化的、物質的生活のかたまりゆく過程で、自分自身を向上進歩の線にそうて改造してゆく。

社会主義的生産が社会主義的人間を創り、この人間が社会主義的生産を不断に発展、改善させつつ同時に自身を社会主義的人格にきたえ上げてゆく。

これが生産、労働と意識、觀念との間の、もっと端的には、人間生活発展のうちに見られるところの弁証法的関係である。社会主義社会建設の過程における成功と勝利とは、弁証法的唯物論、史的唯物論を主軸とするマルクス主義科学の理論の実践の結果であり、この科学の正しさはソ同盟の今日の素晴らしい興隆によって万人に実証

されている。

ボルシェヴィツキの指導のもとに計画され実行され、偉大な成功を示しつつある幾多の大業のうちのひとつは、人心の改造の事業——資本主義的、その他のおくれたイデオロギーをもった何千万人の人民を、社会主義的イデオロギーをもつ人間に改造する事業——である。もつとも、人間改造の事業は社会主義的経済建設、自然改造の事業と切りはなせない相互の内面的関連をもったものではあるが。五ヶ年毎の経済建設計画のうちに、人心の、人間の、改造を同じく意識的に織りこんで計画したという点を特に重視すべきであろう。この計画は人間の意識とその社会的存在に関するマルクスの史的唯物論の理論によって、根本的に導かれたものであることは明らかである。

「社会思想や、理論、政治的制度は、社会の物質的生活の発展、社会的存在の発展の成熟した課題の土台のえに発生したのちには、みずから社会的存在、社会の物質的生活にたいしてはたらきかける。そして社会の物質的生活の成熟した課題の解決を最後まで徹底させ、この物質的生活のいつその発展を可能にするために必要な諸条件をつくりだすのである。」<sup>(2)</sup>

十月大革命ののち社会主義社会建設の使命を負うたボ党は、この建設の事業を現にロシアに住んでいる数千万の人民大衆の協力によって遂行するよりほかなかった。この人民は、云うまでもなく、幾世代も以前から資本主義社会で生活してきたものであり、したがって資本主義的生活慣習と個人主義的觀念と私有欲とを全身にかたくまといつけていた。人口のうちの小部分を占めるに過ぎない都市のブルジョアと地主は、客易にかたづけることができた、しかし大部分の人口を構成する農・工・業的小商品生産者・商人などの資本主義的分子は追いつけ

とも圧迫することもできない。彼らにたいしては、社会主義の側へ彼らが納得して移ってくるまで、説得と実例を示すことによって、辛棒強よく働きかけるほかなかった。

権力を握ったプロレタリアートは都市のブルジョアジーと地主をかたずけただけでは、階級をなくしたとも、資本主義の息の根をとめたともいうことにはならない。ロシアの国内に小経営が、小商品生産者が、多数存在している間は社会主義へよりも資本主義へ復帰する動向の方がつよい。だから、人口の大部分を占める小商品生産者、ことに小規模経営の農民をなくしてしまわなければ、階級の対立はやまないし、社会主義社会の土台もかたまらないのである。

小商品生産者は小型の生産手段を所有し、自分の製品の一部を商品として販売する、商品の売買にたずさわることが、市場の景況によっては儲けることもある。儲けた経験は彼らにブルジョアを夢みさせるし、少数のものは実際ブルジョアにもなる。彼らは小所有者としても、小商人としても、小所有に執着し、売買の自由、市場の投機的魅力につよくひきつけられる、そういう意味で彼らは反社会主義的性格をもつ。「レーニン」は、個人農は最後の資本家階級であるといった。それは、われわれの社会を構成する二つの基本的階級のうち、農民は、その経済が私的所有と小商品生産に基礎をおいている階級だからである。農民が、小商品生産をいとなむ個人農であるかぎり、彼らのうちから、いつでも、たえず資本家を派生しているし、また派生しないわけにはいかないからである。<sup>(3)</sup>このような個人農のうち富農に属する階層を抑制駆逐すると同時に、中小農民層を指導して、彼らの小所有者の精神を止揚し、彼らを社会主義的農民に創りあげる任務をプロレリアの前衛は負っているのである。

しかし、小商品生産者全体としては、つねに資本主義的経営に圧迫され搾取され、商品市場の変動にほんろう

され、過勞して貧窮化する運命をまぬかれぬ。彼らは結局プロレタリア化する、この一面をもつゆえに、彼らの一部はプロレタリア革命に積極的に参加し、一部は中立的立場をとる。小商品生産者、殊に小農民大衆をその貧困・過勞・無知から救いだすことは、革命の主目的のひとつであり、この目的を果すことは、また、同時に社会主義社会の基礎を強固にするゆえんでもあつた。そこで、ソヴェト政府は小農民をその窮乏から救いだすとともに、彼らの意識のうちのブルジョア的なもの乃至はおくれたものを一掃し、社会主義社会の基礎をかためるためにどういう方法をとつたか。

孤立分散した個人的小経営の集団化の方法をとつた。

企業の集団化は、はじめは協同組合企業のかたちでおこなわれたが、生産手段と土地が労働者階級とその国家の所有に属するかぎり、「この協同組合企業は社会主義的企業にことなるところがない。」とレーニンは云つた。

—「協同組合について」参照—

農民は販売・購買協同組合から生産協同組合へと発展的に組織された、コルホーズは生産協同組合のソヴェット権力によって育成された特殊な型である。これは、いく千万の分散した小農経営を都市の工業に結びつけることによって、大工業の発展を助長しつつ農業経営を集団化し、社会主義的大規模生産をおこない得るような基礎となつたものである。農業における小経営をそのままにしておいては、工業の大規模化も期待できないし、国の社会主義的土台もかたまらないわけである。「われわれが小農の国に生活しているあいだは、ロシアには、共産主義にとつてよりも資本主義にとつて、いっそう強固な経済的地盤がある」とレーニンはいつている。<sup>4)</sup>であるから零細な個人農の経営を大規模に社会化することは、ソヴェト権力にとつては国の大工業化の問題と不可分に結び

ついた社会主義社会建設の成否にかかわる最も重大な問題だったのである。それゆえ、個人的農業経営を協同組合化する政策は、大革命後間もなくおこなわれた。初期のコルホーズは農民の手持ちの農具をもちよっただけで、技術のうえから見るる小経営とちがわなようなのだが、例えばドン州のあるコルホーズでは、播種面積三〇—五〇%増という「目まいをおこさせるような」効果をあげた。その理由は「個人的労働の条件のもとでは無力であつた農民たちが、自分の農具をもちよつて、コルホーズに団結するやいなや、きわめて大きな力にかわつたことによるものである。農民たちが、個人的労働条件のもとでは開墾するのが困難だつた荒地や未耕地を、開墾することができるようになったことによるものである。」<sup>5)</sup>

大農業機械で装備されない初歩的段階にあつたコルホーズにおいても、集団化した労働の生産性は飛躍した、トラクターの全国的配布網が完成して系統的に機械化された現今の大コルホーズにおいては、従来の農業と農民とは全く別ものに新生してしまつたに相違ないのである。コルホーズは農民を窮乏と無知から救いだす唯一の道だといわれた通り、ソ同盟・コルホーズにおける生産手段の社会的集団的所有に対応する労働・経営の社会化・集団化は、農業生産力発展のために広大な領域をひらいた、生産力の発展とともに、農民の物質的・文化的・生活水準は絶えまなく向上しつづつある。この事実、簡単に云えば、コルホーズが農民に利益を与えており、よりよき将来を約束しているという事実が、いく千万農民をコルホーズへ、社会主義の側へ、進んで参加させたのである。コルホーズ農民は、コルホーズへ自分たちの全生活を統合させることが、従前の分散した個人的労働によつて私的利益にあくせくする生活より遙かにまじだということを、コルホーズでの、多くの同志との共同、協力、相互援助をもととする、平和で豊かな日々の生活の実践によつて徹底的に知らされた。だからこそ、プロレタリ

アの指導のもとに国の社会主義から共産主義への向上的推進を積極的になさけているのである。社会主義は人民に押しつけられたものではなく、人民が自分の利益のために進んで闘い取ったものである。

社会主義体制のもとでは、国家・社会の利害と人民・個人の利害との間に対立矛盾が存在しない。国家は人民の国家であり、人民の利益をほかにした国家の利益などというものは考えられない。コルホーズにあつても、コルホーズとその成員・コルホーズ農民との関係は国家と人民のそれと同様である。コルホーズの計画をコルホーズ員が協力して遂行するにあつて、各員がその能力に応じて働けば、働いただけその個人はよりよく報酬されるが、それは同時にコルホーズの利益にもなる。コルホーズをはなれた成員の利益というものはなく、成員の利益とは別のコルホーズの利益なるものも存しない。人間による人間の搾取がなくなったことの人類史的意義は、国家と個人、個人と個人との間の利害の対立、支配隷従関係が絶滅されたという点にある。

何百町歩単位の経営面積をもつコルホーズは、何百人かの組織された協同によつてはじめて経営されるので、そこでは、個人の労働は何百人かの総体の労働の一部分として、すなわち社会的労働としてのみ発動できる。個人が、個人のためにだけトラクターを利用することが不可能であると同じように、個人がトラクターに對抗して手道具で、自分だけの生活をコルホーズ農民の生活以上に豊かにしようなどと考えるのは一つの迷妄に過ぎない。搾取のない集団農場・コルホーズでは、大工業の技術的基礎のうえでおこなわれる農業生産の利益が、直接コルホーズ農民すべての利益となる。個人はコルホーズの社会的生産に協同するよりほか、原則的には、自己の生活をよりよくする方法をもたないのである。

ソ同盟での農業政策は、地主、高利貸による搾取廢絶の基礎のうえで、農業経営の社会化・コルホーズ化によつ

て農民の生産と生活を絶えず引き上げることが企図している。このような生産と生活との社会的・経済的・条件を創りだし、この新しい条件のうえで、旧来の私有財産制度のもとでゆがめられた人間性をためなおそうというのが、広い意味での、ソ同盟の教育乃至イデオロギー政策なのである。

旧ロシアの農民は資本主義国一般の農民とひとしく、その性格は偏狭で猜み深く、排外的であり、吝嗇に近い利己主義者・私有財産の狂信者であり、おくれた観念や迷信にとらわれた頑固な保守主義者であった。これらの農民的性格は、農民に固有な生れながらの天性では決してない。それは農民が資本主義社会のうちで、農民としておかれた社会的・経済的地位、条件によって決定され、つくられた性格である。彼らの経営は零細で個人的、孤立的で、技術は低い水準を伝統的に墨守したものであり、その生活は、甚しい搾取のもとで人間以下の消費と駄獣以上の労役に縛りつけられ、窮迫、過労、無知の泥沼のなかでもがきつつその生命を終るといような軌道のように固定されていた。小農民のさきあげた一般的性格は、彼らのこうした社会的、経済的環境の必然的産物であることは疑いのないところである。

右述べたところによつてみるに、凡ての国の勤労農民が過労と窮迫から免がれて開明された、人間の名にふさわしい、文化生活をいとむことのできる唯一の道は、社会主義への、コルホーズ的集団経営への道であることがわかる。ソ同盟における実践とその現実の結果がそれを証明している。

社会主義の争いがたい強味は、それが人民の要求にそい、歴史の進む方向にそい、真理を實踐にうつし実践によつて真理を深かめ高かめてゆくところにある。資本家は「貧乏は共産主義の温床」だということを云うし、知つてもいるだろう。が、しかし、資本家階級は貧乏を絶滅しえないことはもとより、その緩和のための手さえう

つことができない。資本の蓄積とプロレタリアートの富裕化とは、両立しえない事実である、だから、ブルジョアジーは共産主義の温床―貧乏―を維持拡大しながら資本主義を死守しなければならぬ羽目に陥る。この抜け道のない矛盾に対処する彼らのあがきは、「反ソ」「反共」の宣伝に収約的にあらわれている。共産主義は鬼か蛇かのように恐ろしい、あらゆる非道悪徳の権化であるかのように、マス・コム・ユニケーションの手段によって誹謗する。デマによる党と人民との離反を策する以外に手がないのである。

真実のあらわれることを恐れ、真実をゆがめ、蔽いかくすことに自己の存立を託しているような階級に積極的な存続の意義があるであろうか。真実は必ずあらわれ、虚偽は暴露されて亡びるといのが人類生活を貫く事実。真実である。亡びるものは、必然に亡びるべき条件をつくり出して亡びるのである。

新たに生れでて伸びてゆくものを抑止するどんな力も存しない。農民の生きて栄えてゆくための新しい社会主義的形態、コルホーズは、「強制労働」「奴隷状態」だと、自由な世界から、どんなにわめかれても、それとはまるでかかわりなしに、ソ同盟の農民の自発的創意と社会主義競争によって日に月に拡大強化されてゆく。それが人民の・真実の・不敗の力なのである。一九二九年農業の基礎がほぼ全面的にコルホーズの上に移りつつあったとき、全村、全地区が全体としてコルホーズへ加入してきたとき、「私有財産の堡壘」中農層が自から大衆的にコルホーズへ加入してきたとき、スターリンはソ同盟における社会主義確立―資本主義復活の最後の期待の崩壊―について、次のように述べた。

「ソ同盟における資本主義の復活を夢みる万国の資本家の最後の期待―「私有財産の神聖な原理」は、くずれ、こなごなになりつつある。彼らが、資本主義の地盤をこやす材料と見ている農民は、ほめたたえられた「私

有財産」の旗を、集団的に見すてて集団経営の軌道へ、社会主義の軌道へうつっている。資本主義の復活にたいする最後の期待がくずれおちつつある。」<sup>(6)</sup>

ソ同盟における社会主義建設の事業は、電化によって国のすべての産業を、近代的大規模生産の基礎のうえに築きあげることによって、社会主義社会の物質的・経済的・土台をかためること、それが基本的なものであった。そして、この社会の物質的土台の上に全ソ連人民の生活をおきかえて、その意識の変改——私有欲のかたまりを社会主義的精神でおきかえる——を合法的・徹底的に試みる。だから、社会主義社会の物質的土台の成熟、強化と、人間意識のうちの資本主義的なものの死滅と社会主義的なものの新生、成長とは、弁証法的相互関連のもので、互に他をより、強化しつつ発展するのである。社会主義的生産が社会主義的精神とともに不断に発展する、そこにソ同盟の社会的生命の枯渇することのない源泉がある。スターリンはコルホーズを、機械を、農民の心理を改造するための主要な基礎であるとみなした。トラクターの操縦になれた農民は、ふたたび鋤を手にとろうとはしない、科学を知った農民は迷信から自由になり、団結の力を知った農民は孤立にはかえらない。ソヴェト農民は資本家・地主の忠僕とは永久に絶縁してしまった。

「コルホーズ農民をつくりかえ、彼らの個人主義的心理をためなおし、彼らを社会主義社会の真の勤労者にかえるためには、まだまだたくさん仕事をしなければならぬ。そして、この仕事は、コルホーズの機械化が急速にすすむばすすむほど、そのトラクター化が急速にすすむばすすむほど、いよいよ急速になしとげられるであろう。だが、このことは農村を社会主義的に改造するて、こととして、コルホーズがもつ最大の意義を、すこしも小さくするものではない。」

コルホーズの巨大な意義は、まさにコルホーズが、農業に機械とトラクターを応用するための主要な基礎であること、それが、農民をつくりかえ、社会主義の精神によって彼らの心理を改造するための主要な基礎であることにある。<sup>(7)</sup>

農民の労働と生活のしかたを、従来の個人的な基礎から集团的・農会主義的なコルホーズの基礎のうえにおきかえることによつて、云いかえると、人間を資本主義的環境から社会主義的環境へ転置することによつて、人間の意識や心理を資本主義的なものから社会主義的なものに改造するという方法は、弁証法的唯物論の実践としてソ同盟においてその正しさを争う余地なく実証されたのである。そして、この方法はコルホーズの場合にかぎられたものではなくて、人心の改造に関するソ同盟のすべてのイデオロギー政策において原則的に採られているものである。次に、これに関する事例を宗教その他について見よう。

- 註(1) 堀江邑一監修「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」上 五五頁参照  
(2) スターリン「レーニン主義の諸問題」一一五八頁  
(3) 「スターリン全集」第十二卷 五六頁  
(4) 「レーニン主義の諸問題」―「ソ同盟共産党内の右翼的危険について」 三〇〇頁  
(5) 「スターリン全集」第十二卷・「ソ同盟における農業政策の諸問題によせて」 一七六頁  
(6) 「レーニン主義の諸問題」―「偉大な転換の年」 四一七頁  
(7) 前出「スターリン全集」 一八六頁

### 三 宗教と物質的生活

ソ同盟では、教会は国家や教育から完全に切りはなされ、信仰は私事として全く個人の自由にまかされている。国家は宗教を圧迫もしなければ保護もしない。憲法第二百二十四条には「宗教的礼拝の自由と反宗教宣伝の自由は、すべての市民にみとめられる。」とある。国家権力の保護干渉を全々受けない宗教、信仰についていくらかでもの強制をうけない市民は、自由諸国においては極めて稀である。それに対比するとソ同盟における信仰の自由は徹底的であり、宗教の存亡は全く自由に放任されている。

では、共産主義者は宗教の存在意義、人類にたいする有用な役立ちを認めているかというに、勿論そうではない。宗教は阿片だというマルクス、レーニンの言葉がひろく知られているように、彼らは宗教を支配・搾取階級が、人民を支配し搾取するための有力な精神的武器であるともみなしている。それで、人民を宗教の呪縛から解放すること、宗教を根絶することは、宗教にたいするマルクス・レーニン主義の原則である。

それにもかかわらず、ソ同盟においてなお宗教の存在と信仰の自由が認められているのは何故か。それには、その答は次のようだ。すなわち、ソ同盟では数次の五ヶ年計画の成功的遂行の結果、社会主義社会の土台が揺ぎない堅固なものとなり、もう資本家地主の復活、人間による人間の搾取の可能性は永久に消滅した。こうした社会では、宗教にとつての存立の社会的・物質的土台が掘り崩され、なくなってしまうのである。この社会では、宗教は、いわば根を切られた木と同じで、もう枝葉を繁らす生命力は失われ、次第に枯死する運命を免れないのである。だから、宗教にたいするソ同盟の態度は、一般的には自由放任——死滅するにまかせる——ということになるのである。<sup>(1)</sup>

このような、社会的・物質的条件をつくりだしたうえば、権力によって宗教や個人の信仰に直接の制限や圧迫

を加え、人民に無信仰を押しつけることは、害あって益なき愚策である。宗教は数世代にわたって伝統された人民の生活慣習や習俗と同じく、否それらよりずっと強い影響力と生命の情力をもって心のうちに生きのこる。この宗教的影響力をすべての人民の心のうちから駆除するには、そのための物質的条件の成熟とマルス主義教育の結果にまたなければならぬ。それは長期を要するが、誤りのない、必ず成功が期待される宗教政策である。

ひるがえって、自由諸国における宗教に負わされた役割を見るに、それは人々に階級闘争によつて、自力でこの世に人民の住み易い天国の建設を断念させること、云いかえると、自然にたいしても、社会にたいしても、人間の無力さを説教して、あらゆる災禍不幸を諦らめ忍従させ、その償いをもつばら来世に求めさせることにあつた。宗教のこの役割は、人民の搾取と隷従に基礎をおく社会において、すべての支配階級によつて、搾取と支配を維持するための有力な手段として利用された。ブルジョアジーも、勿論、宗教を階級支配のイデオロギー的武器として愛用する、その点では前時代の支配階級にまさるとも劣るものではない。

神は被圧状態を強固にし、階級闘争を眠りこませる観念の複合体であると、レーニンがいつたとおり、宗教は階級支配を維持するために、ブルジョアジーの手からプロレタリアート・農民に与えられた麻痺薬・阿片なのである。宗教は人間の知能——自然と人間とについての認識——の最も低い段階にあつた時代——原始・未開時代——に発生したものだ、それが現在においてもなお生きて強い影響を人心に与えているのは如何なる理由によるものか。宗教の現社会における根源はどこにあるか。

資本主義諸国における宗教の根源は主として社会的なものである。すなわち、労働者、農民、小市民——一般勤労者——が資本主義社会のうちでおかれてゐる地位の極めて不安定であるという事実、彼らが自分の生活を自

分の意思と自分の力で、自主的に営んでゆくことができないという事実、彼らの生活は彼らの予見や力の全く役に立たない資本主義社会のあらゆる偶然に託されているという事実、要するに、資本主義社会における彼らの生活の不安、その不安にたいする四六時中の恐怖、それらが近代社会における宗教の根源なのである。

「資本の盲目的な力、それは人民大衆によって予知されえないがゆえに盲目であり、またそれは、プロレタリアアおよび小所有者の生活の一步ごとに、『突然の』『思いがけない』『偶然的な』零落や破滅や、乞食、貧困者、淫売婦、餓死への転落やを大衆にもたらす恐れがあり、また現にもたらしているのであるが、この資本の力にたいする恐怖——それこそが現代宗教の根源」である。<sup>(2)</sup>

生産の無政府性、市場における価格の変動、恐慌等資本の運動はあらゆる偶然を通じて、人々の意思、希望などから隔絶した自然法則——天意——のようにあらわれる。この法則が人民によって認識されなかり、彼らの失業、破産による餓死の脅威は厄神のたたり、でもあるかのようにうけとられる。たたりにたいしておまじないが、宗教的なものが、必要なものであり、この必要があるかぎり宗教は維持される。

逆にいえば、人民大衆の生活が彼ら自身の意思と力によって維持され、なおその向上が保証されて、誰れも不意に貧乏になつたり、餓死したりするような不安や恐怖を感じることがなくなれば、そういう社会では、「神々を創りだす根源」——恐怖とともに宗教もまた消滅するのである。では、人間による人間の搾取を廃絶し、労働が義務であるとともに人民の権利であり、したがって失業ということがなく人民の生活が人民の力によって保証されている国、ソ同盟では、宗教のための社会的根源が失われてしまっているのだが、その国の人民の宗教にたいする意識はどんなに変つたろうか、その一例をみよう。

終戦から一九四八年までソ同盟にいた山田清三郎氏は、中央アジア、カザヒ共和国の首都マルマ・アタで皴深い  
い柔らかな顔をした一老婆と宗教について次のような問答を取りかわした。

「ソヴェトには、神様はありますか」

「ない、ない」老婆は、かぶりをふった。

「でも、十字を切っているお婆さんを、ときどき見ますが」

「信仰は自由です」老婆はいった。

「レーニンも、スターリンも、神様を別に追放はしませんでした。しかし、私には、もはや神様は要らなくな  
ったのです」

「何故ですか」

「はつきりしていませんか、神様は、私たちに食べ物はくれない。スターリンは、私たちに食べ物  
のことを心配してくれるのです」<sup>(3)</sup>

山田氏は社会主義イデオロギーがソヴェトで老人のあいだで、どううけいれられているかについて興味をも  
ち、とくに宗教について老婆に訊ねてみたのだ。その答えは右のように、スターリンが食べ物のことを心配  
してくれるから——ソヴェト政権が人民の生活を保証してくれるから——もう神様、宗教はいらなくなったとい  
うのだ。働く人民に一般に認められる性情の率直さ素直さ、理解の正しさがこの老婆の答えのうちに直接鮮やか  
にみられる。それとともに、一老婆にまでかくもはつきり神を否定させるまでにいたさせたという事実は、物質  
と精神との関係についての正しい科学的把握をもととするマルクスレーニン主義の正しきの疑うことのできな

い証拠としてあげられるべきである。

この国では、農工業の生産力を不断に發展させることによって、国民の文化的・物質的・生活水準を累次引き上げるという方法が、結局、宗教をはじめ、およそおくれた習俗、観念、思想を清掃し、国民の意識、知性、徳性を高めるための最も有力なことで、こととして用いられているのである。数次の五ヶ年計画や自然改造計画の遂行過程で、外界との闘争の勝利を通じて、国民は神にたよらなくても自力で確実に自分たちの生活を護り、豊かに明るく暮すことのできることを身をもって悟るにいたった、宗教の消滅すべき現実の条件はそこに見出されるのである。

人民の手に政権が握られ、マルクス・レーニン主義の真理の実践が国の政治となつてあらわれているところは、経済建設と人心改造との相互関連の関係が、意識的、積極的に利用され、社会主義社会の土台が積みかさねられてゆく。その事情は中国の場合も同様である。

註(1) 「湖南農民運動の視察報告」（一九四七年）のうちで毛沢東は述べている。

「家族主義とか、迷信的な考えとか、ただしくない男女関係とかいったものの破壊は、政治闘争と経済闘争の勝利のあとで自然に得られる成果である。……………」

「仏像は農民が立てたものだから、時期がくれば、農民は自分たちの手でその仏像をとりすてることができる。……仏像は農民自身がとりのぞくべきであり、……はたもののがうけおつてやるのは、まちがいである」（毛沢東「農村調査と農民運動」五七頁）と。これはマルクス主義の普遍的理論からする古い、おくれたイデオロギーにたいする取扱方である。

(2) コンスタンチノフ監修「史的唯物論」下巻二八二頁

「宗教は抑圧された人間のためいきであり無情な世界の感情であり、非情な苦難の時代の精神である。それは人民の阿片である。」マルクス「ヘーゲル法哲学の批判のために」（マル・エン全集・第一巻・三八五頁）

#### 四 中国における事例

帝国主義、封建主義および官僚資本主義に反対して闘い、人民民主主義革命に成功した中華人民共和国では、労働者階級の指導による人民民主專政を實行し、国の進路を一九四九年以来社会主義の路線にのせた。その社会主義への道は、現在直ちに資本主義を倒すことによつてではなく、資本主義を利用しながら制約することによつて進められている。「資本主義を制約する過程は、民族ブルジョアジーとのあいだの一面提携・一面闘争の過程であり、また民族ブルジョアジーの人間改造過程でもある。」<sup>(1)</sup>といわれる。ソ同盟について見たと同様に、中国においても社会主義社会建設の過程は、人間と外界との闘争過程であり、人間は外界を改造しつつ同時に自身を成長させてゆく、すなわち、資本主義的、封建的人間を社会主義的人間に改造してゆくのである。

その人間改造の一例について考えてみよう。

新中国社会のいちじるしく人目をひく新現象のひとつとして、泥棒や売笑婦がいなくなった、もしくは、非常に少なくなったということが伝えられる。盗みや売笑のよくないことは、おそらく、私有財産制の成立以来認められており、この犯行に非難、制裁、懲罰を加えない国はなかったためであり、現にない。自由諸国では盗みのよくないことは、三才の童児でも知っているほど普遍した社会道德の常識になっている、売笑についても同じである。にもかかわらず、盗人と娼婦は決して根絶されないどころか、むしろ多くなる傾向である。自由諸国のお仲間だった頃の中国の如きは、盗品市が公開されたほど盗人が多かった。その中国が、自由諸国からはなれて、中

共と呼ばれる人民民主主義の新中国に生れ変わってから五年足らずのあいだに、泥棒のいない極く少ない国になってしまったのである。

その原因はどこにあるだろうか。それは社会体制の相違のうちに、したがって人民の生活の変化のうちに、なければならぬ。人民民主主義の国、中国では主たる搾取階級——帝国主義とその手先き官僚資本と封建的地主——が一掃された結果、働く農民に土地が、労働者に仕事と正常な賃銀が与えられ、総体としての人民の生活が空腹と餓死の脅威から自由になった、彼らには仕事が与えられ、働けば食えるというかたちで、その生活が保証されるようになったのである。仕事と生活をすべての働く人民に保証するところの新体制の社会制度が、中国にうちたられた、その社会変革のうちにこそ、盗みと売笑の減少・消滅の原因が認められねばならない。

正常な人間はだれでも、盗みや売笑を恥しい、よくない行為だということを感じており、知っている、だれでもそんなことをしたくはないのである。にもかかわらず、盗んだりするのは、実にやむをえない事情——空腹、餓死——に迫られるからのことである。腹が空いてくると、生物としての人間は何はさておき空腹を満たし生命を守ろうとする、そのためにする盗みであり、売笑である。だから、資本主義社会では、盗みと売笑をしないで最後まで人間性をけがれなく守ろうとする人民のために、平等に餓死・自殺の自由がひらかれている。死か盗みかの二者択一の前に立たされると、多くの人間は後者をえらぶ。自殺の自由をすてたものには監獄の不自由が与えられる。しかし、餓えを一掃しないかぎり、懲罰によっては人心は改造されない。盗人と売笑婦の起原は、私有財産の、人民の貧窮の、それとともに古く、その存在は私有財産制の最高発展段階・資本主義の滅亡—恐慌、失業、貧窮の消滅—とともに消滅する必然性をもつ。

腹に食物を満たしてから心の状態を変えよう——人間の社会的存在を変えてからその意識を変えよう——というのがマルクス主義の方法論であり、その実践の結果が、新中国ではホテルの部屋に鍵をかけないとか、街娼が姿を消したとかの事実となってあらわれたのである。

——一九五四・八・一八——

註(1) 「中国共産党の三十年」国民文庫版 八四頁